

うつせみ

樋口一葉

青空文庫

家の間敷は三疊敷の玄關までを入れて五間、手狭なれども北南吹とほしの風
 入りよく、庭は廣々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつてつくと見えて、
 場處も小石川の植物園にちかく物靜なれば、少しの不便を疵にして他には申す
 旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしにもなりけれど、いまだ
 に住人のさだまらで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき。家は何處までも
 奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をとて來るものも無きにはあ
 らねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七圓五十錢といふに、
 それは下町の相場とて折かへして來るはなかりき、さるほどに此ほどの朝まだき四十に
 近かるべき年輩の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そくさとおち
 き無きが差配のもとに來りて此家の見たしといふ、案内して其處此處と戸棚の敷など
 を見せてあるくに、其等のことは片耳にも入れて、唯四邊の靜とさはやかなるを喜び、
 今日より直にお借り申しまする、敷金は唯今置いて參りまして、引越しは此夕暮、

いかにも急速きふそくでは御座ござりますが直様掃除すくさまさうじにかゝりたう御座ござりますとて、何なんの仔細しさいなく
 約束やくそくはとゝのひぬ。お職しよくげふ業とはと問とへば、いえ別段べつだんこれといふ物ものも御座ござりませぬと
 至極しごく曖昧あいまいの答こたへなり、御人ごにん數ずはと聞きかれて、其その何なんだか四五人しごにんの事ことも御座ござりませぬし、
 七八人しちはちにんにもなりますし、始終とほしごたごたして埒らちは御座ござりませぬといふ、妙な事めうの事ことと思おもひし
 が掃除さうじのすみて日暮ひぐれれがたに引移ひきうつり來きたりしは、合乘あひのの幌ほろかけ車くるまに姿すがたをつゝみて、開ひらき
 たる門もんを眞直まつすぐに入りて玄關げんくわんにおろしければ、主ぬしは男をとこと女をんなとも人ひとには見みえじと思おもひ
 しげなれど、乘のり居ゐたるは三十許さんじふばかりの氣きの利ききし女中風ぢよちゆうふうと、今一人いまひとりは十八じふはちか、九
 には未だまと思おもはるゝやうの病美人びやうびじん、顔かほにも手足てあしにも血ちの氣けといふもの少しもなく、透すき
 とほるやうに蒼白あをしろきがいたましく見みえて、折柄をりから世話せわをりから、折柄せわ世話せわやきに來きて居ゐたりし差配さはいが心こころに、
 此人こゝれを先刻さきのそゝくさ男をとこが妻つまとも妹いもとも受うけとられぬと思おもひぬ。
 荷物にもつといふは大八だいはちに唯一たびとくるま來きたりしばかり、兩隣りやうどなりにお定めさだめめの土産みやげは配くばりけれど
 も、家いへの内うちは引越ひっこしらしき騒さわぎもなく至極しごく寂寞ひつそりとせしものなり。人數にんずは彼かのそそくさに此こ
 のぢよちゆうぢよちゆう女に中ちゆうと、他ほかには御飯ごはんたきらしき肥大女ふとちよおよび、其夜そのよに入りてより車くるまを飛とばせて二人ふたり
 ほど來きたりし人ひとあり、一人ひとりは六十ろくじふに近ちかかるべき人じん品びんよき剃髮ていはつの老人らうじん、一人ひとりは妻つまなる
 べし對つゐするほどの年輩ねんぱいにてこれは實法じつぽふに小ちひさき丸まる鬚まげをぞ結ゆひける、病やみたる人ひとは來く

よりやがて奥深おくふかに床とこを敷しかせて、括くり枕まくらに頭かぶを落おちつかせけるが、夜よもすがら枕まくら近ちかく
 にありて悄しよんぼり然しとせし老人としより二人ふたりの面おもやう、何處どこやら寢顔ねがほに似にた處ところのあるやうなるは、此こ
 のむすめもし娘むすめの若ちも父ちち母ははにてはなきか、彼かのそくさ男をとこを始はじめとして女おんな中ちゆうども一同どうだん旦那んな
 様さま御新造ごしんぞう様さまと言いへば、應おい々くと返事へんじして、男をとこの名なをば太吉たきち太吉たきちと呼よびて使つかひぬ。
 あくる朝風あさかぜすゞしきほどに今いま一人車ひとりくるまに乘のりりつけゝる人ひとのありけり、紬つむぎの單衣ひとへに白しろちりめ
 んの帶おびを巻まきて、鼻はなの下したに薄うすら髻ひげのある三十位さんじふぐらゐのでつぷりと肥ふとりて見みだてよき人ひと、小
 さき紙かみに川村かはむらた太吉たきちと書かいて貼はりたるを讀よみて此處ここだくと車くるまより下おりける、姿すがたを見みつけて、
 おゝ番ばん町ちやうの旦那様だんなさまとお三さんどんが眞ま先つきに襷たすきをはづせば、そくさは飛とび出だしていやお
 早はやいお出いで、よく早さつ速そくおわかりになりましたな、昨日きのふまで大塚おほつかにお置おき申まをしたので御座ござ
 りますが何分なにぶんもう、その何なんだか頻しきに嫌いやにおなりなされて何處どこへか行ゆかう行ゆかうと仰おつしや
 る、仕方しかたが御座ござりませぬで漸やつとまあ此處ここをば見みつけ出だしまして御座ござります、御覽ごらん下くださり
 ませ一寸ちよつと斯かうお庭にはも廣ひろう御座ござりますし、四隣あたりにが遠とほうござりますので御氣分ごきぶんの爲ためにもよか
 らうかと存ぞんじまする、はい昨夜ゆうべはよくお眠やすみになりましたが今朝けさほど又また少しその、一寸ちよつと御
 様子やうすが變かはつたやうで、ま、いらしつて御覽ごらん下くださりませと先さきに立たつて案内あんないをすれば、心しん
 配いらしく髻ひげをひねりて、奥おくの座敷ざしきに通とほりぬ。

二一

氣分きぶんすぐれてよき時ときは三歳みつご兒このやうに父ちち母ははの膝ひざに眠ねるか、白紙はくしを切きつて姉あねさま様さまのお製つくり
 に餘念よねんなく、物ものを問とへばにこくと打うち氣きみて唯ただはいくと意味いみもなき返事へんじをする温順おとなしさ
 も、狂風きやうふう一陣いちぢん梢ささぎをうごかして來きたる氣きの立たつた折をりには、父とうさん様さまも母かあさん様さまも兄にいさん様さまも誰たれ
 も後生ごしやう、顔かほを見みせて下くださるな、とて物陰ものかげにひそんで泣なく、聲こゑは腸はらわたを絞しぼり出だすやうにて
 私が悪わるう御座ござりました、堪かん忍にんして堪かん忍にんしてと繰くり返かへしく、さながら目めの前まへの何なにやら
 に向むかつて詫わびるやうに言いふかと思おもへば、今行いままする、今行いままする、私わたしもお跡あとから參まゐりまする
 とて日ひのうちには看護まもりの隙ひまをうかゞひて驅かけ出いすこと二度にど三度さんどもあり、井戸いどには蓋ふたを置おき、
 きれ物ものとては缺はき一いつ挺つちやう目めにかゝらぬやうとの心配こころくばりも、危あやきは病やまひのさする業わざかも、此こ
 のかよ物ものとては缺はき一いつ挺つちやう目めにかゝらぬやうとの心配こころくばりも、危あやきは病やまひのさする業わざかも、此こ
 纖弱むすめき娘むすめ一人ひとりと止とむる事ことかなはで、勢いきほひに乘のりて驅かけ出いす時ときには大だいの男をとこ二人ふたりがゝりに
 てもむつかしき時ときのありける。

本宅ほんたくは三番町さんばんちやうの何處どこやらにて表へうさつ札みを見ればむ、彼あの人の家ひとうちかと合點がてんのゆくほど
 の身分みぶん、今いまさら此處こゝには言いはずもがな、名前なまへの恥はづかしければ病びやう院いんへ入いれる事こともせで、

醫者も心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月とおなじ處に住へば見る物残らず嫌になりて、次第に病ひの募ること見る目も恐ろしきほど凄まじき事あり。

當主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやるべし、病ひにふしたるは櫻さく春の頃よりと聞くに、それより晝夜臉を合する間もなき心配に疲れて、老たる人はよろしくたよくと二人ながら力なさうの風情、娘が病ひの俄かに起りて私はもう歸りませぬとて驅け出すを見る折にも、あれあれ何うかして呉れ、太吉々々と呼立るほかには何の能なく情なき躰なり。

昨夜は夜もすがら靜に眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覺し、顔を洗ひ髪を撫でつけて着物もみづから氣に入りしを取出し、友仙の帯に緋ぢりめんの帯あげも人手を借りずに手ばしこく締めたる姿、不圖見たる目には此様の病人、人とも思ひ寄るまじき美しくしさ、両親は見返りて今更に涙ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持來りて召上りますかと問へば、いやくと頭をふりて意氣地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明まするか、歸る事が出来るで御座んしやうかとして問ひかけるに、年季が明るといつて何處へ歸る料簡、此處はお前さんの家ではないか、此ほかに行くところも無か

らうではないか、分らぬ事を言ふものではありませぬと叱られて、それでも母様私は何處へか行くので御座りましやう、あれ彼處に迎ひの車が来て居ます、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大いなる蛛の巣のかゝりて、朝日にかゞやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り来て、あれあんな事を、貴君お聞遊ばしましたかと良人に向ひて忌はしげにいひける、娘は俄に萎れかへりし面に生々とせし色を見せて、あのそれ一昨年のお花見の時ねと言ひ出す、何えと受けて聞けば學校の庭は奇麗でしたねえとて面白さうに笑ふ、あの時貴君が下さった花をね、私は今も本の間へ入れてあります、奇麗な花でしたけれども、う萎れて仕舞ました、貴君にはあれから以來御目にかゝらぬで御座んせぬか、何故逢ひに来て下さらないの、何故歸つて来て下さらぬの、もうお目にかゝる事は一生出来ぬので御座んするか、それは私が悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけれど、それは兄様が、兄が、あゝ誰れにも濟みませぬ、私が悪う御座りました免して免してと胸を抱いて苦しさに身を悶ゆれば、雪子や何も餘計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病氣なのだから、學校も花もありはしない、兄様も此處にお出でなさつては居ないのに、何か見えるやうに思ふのが病氣なのだから氣を落

つけて舊もとの雪子ゆきこさんに成なつてお呉くれ、よ、よ、氣きが附つきましたかえと脊せを撫なでられて、母ははの膝ひざの上にすゝり泣なきの聲こゑひくゝ聞きえぬ。

三

番町ばんちやうの旦那様だんなさまお出いでと聞きくより雪ゆきや兄様にいさんがお見舞みまひに來きて下くだされたと言いへど、顔かほを横よこにして振ふり向むかうともせぬ無禮ぶれいを、常つねならば怒いかりもすべき事ことなれど、あゝ、捨すて、置おいて下ください、氣きに逆さからつてもならぬからとて義母ははが手てづから與あたへられし皮蒲團かはぶとんを貰もらひて、枕まくらもとを少し遠とほざかり、吹ふく風かぜを背せにして柱はしらの際きはに默もく然ねんとして居ゐる父ちちに向むかひ、靜しづかに一つ二つ詞ことばを交まじへぬ。

番町ばんちやうの旦那だんなといふは口數くちかず少すくきなひと見みえて、時ときたま思おもひ出だしたやうにはたくゝと團う扇ちはつかひするか、巻煙草まきたばこの灰はひを拂はらつては又また火ひをつけて手てに持もつてある位くらゐなもの、絶たえず尻しり目りめに雪子ゆきこの方かたを眺ながめて困こまつたものですなと言いふばかり、あゝ此こんな事ことと知しりましたら早はやくに方法ほうほうも有あつたのでしやうが今いまに成なつては駟馬しめも及およばずです、植村うゑむらも可か愛あい想さうな事ことでした、とて下したを向むいて歎息たんそくの聲こゑを洩もらすに、どうも何なんとも、私わしは悉しつ皆かい世せ上じやうの事ことに疎うと

しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒も無い事に成つてな、第一は此娘の
 氣が狭いからではあるが、否植村も氣が狭いからで、どうも此様な事になつて仕舞つた
 で、私共二人が實に其方に合せる顔も無いやうな仕儀でな、然し雪をも可愛想と思つ
 て遣つて呉れ、此様な身に成つても其方への義理ばかり思つて情ない事を言ひ出し居る、
 多少教育も授けてあるに狂氣するといふは如何にも恥かしい事で、此方から行くと
 家の恥辱にもなる實に憎むべき奴ではあるが、情實を酌んでな、これほどまで操と
 いふものを取止めて置いただけ憐んで遣つて呉れ、愚鈍ではあるが子供の時から是れとい
 ふ不出来しも無かつたを思ふと何か残念のやうにもあつて、眞の親馬鹿といふのであら
 うが平癒らぬほどなら死ねとまでも諦めがつきかねるもので、餘り昨今忌はしい事を言
 はれると死期が近よつたかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家には何か迎ひに来るもの
 が有るなど、騒ぎをやるにつけて母が詰らぬ易者などにも見て貰つたか、愚な話しで
 はあるが一月のうちに生命が危いとかな言つたさうな、聞いて見ると餘り快くもないに
 當人も頻りと嫌がる様子なり、ま、引移りをするが宜からうとて此處を捜させては來
 たが、いや何うも永持はあるまいと思はれる、殆んど毎日死ぬ死ぬと言て見る通り人
 間らしき色艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れる事が無いに、

そればかりでも身躰からだの疲勞ひらうが甚はなしからうと思はれるので種々いろくに異見いけんも言いふが、何どうも病やまひの故せであらうか兎角とかくに誰たれの言いふ事ことも用もちひぬに困こまりはてる、醫者いしやは例れいの安田やすだが來くるので斯かう素人しろうとまかせでは我わがまゝばかり募つつて宜よくあるまいと思はれる、私の病びやうあん院いへ入いれる事ことは不承知ふしようちかと毎まい々く聞きかれるのであるが、それも何どうあらうかと母ははなどは頻しきりにいやがるので私わしも二にの足あしを踏ふんで居ゐる、無論むろん病びやうあん院いへ行ゆけば自宅じたくと違ちがつて窮きゆうくつ屈くつではあらうが、何なにぶん此この頃ころ飛出とびだしが始はじまつて私わしなどは勿論もちろん太吉たきちと倉くらと二人ふたりぐらゐの力ちからでは到底たうてい引ひとめられぬ働はたらきをやるからの、萬まん一いち井戸いどへでも懸かられてはと思おもつて、無論むろん蓋ふたはして有あるが往來わうらいへ飛出とびだされても難儀なんぎし至極しごくなり、夫等それらを思おもふと入院にふあんさせやうとも思おもふが何なにかふびんらしくて心こゝろ一つには定さだめかねるて、其方そちらに思おもひ寄よりもあらば言いつて見みて呉くれとてくるノと判そりたる頭つむりを撫なで、思案しあんに能あたはぬ風情ふぜい、はあくくと聞居きゝゐる人は詞ひとことばは無なくて諸共もろともに溜ためい息きなり。

娘むすめは先刻さきの涙なみだに身みを揉もみしかば、さらでもの疲つかれ甚はなしく、なよくと母ははの膝ひざへ寄添よりそひしまゝ眠ねぶれば、お倉くらお倉くらと呼よんで附添つきそひの女子をなごと共に郡内ぐんないの蒲團ふとんの上うへへ抱いだき上げて臥ふさするにはや正躰しやうたいも無なく夢ゆめに入るやうなり、兄あにといへるは靜しづかに膝行いざり寄よりてさしのぞくに、黒く多くろき髪おほの毛かみを最いし惜こしげもなく引ひつめて、銀杏いとうがへ返かへしのこはれたるやうに折返をりかへし折をりか

へ返し鬚形に疊みこみたるが、大方横に成りて狼藉の姿なれども、幽靈のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出し、浴衣の胸少しあらはに成りて、締めたる緋ぢりめんの帯あげの解けて帯より落かゝるも艶かしからで慘ましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯々と呼び、書物よむとて有し學校のまねびをなせば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正躰得しれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに讀まれたる村といふ字、郎といふ字、あゝ植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

四

けふ今日是用なしの身なればとて兄は終日此處にありけり、氷を取寄せて雪子の頭を冷す附添の女子に代りて、どれ少し私がやつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いゝさ先きさせて見てくれとて氷嚢の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですよとて、

は、おやごころづ
 母の親心附けれども何の事とも聞分ぬと覺しく、眼を見開きながら空を眺めて、あれ
 奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様 兄様と聲を限りに呼べ
 ば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄は此處だから、殺しはせぬから安心して、な、
 宜いか、見えるか、兄だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さんやお母
 さんを安心させて呉れ、こら少し聞分けて呉れ、よ、お前が此様な病氣になつてか
 ら、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠になつた事はない、お疲れなされてお瘦せな
 されて介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく解る
 人ではないか、氣を静めて考へ直して呉れ、植村の事は今更取かへされぬ事であるか
 ら、跡でも懇に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向れば、彼れは快く瞑すること
 が出来るよと遺書にもあつたと言ふではないか、彼れは潔く此世を思ひ切つたので、お前の
 事も併せて思ひ切つたので決して未練は残して居なかつたに、お前が此様に本心を取
 りみだ
 亂して御両親に歎をかけると言ふは解らぬではないか、彼れに對してお前の處置の無
 情であつたも彼れは決して怨んでは居なかつた、彼れは道理を知つて居る男であらう、
 な、左様であらう、校内一人の人だとお前も常に褒めたではないか、其人であるから決
 してお前を恨んで死ぬ、其様な事はある筈がない、憤りは世間に對してなので、既にそれ

は人も知つて居る事なり遺書によつて明かではないか、考へ直して正氣になつて、其後の事はお前の心に任せるから思ふまゝの世を経るが宜い、御兩親のある事を忘れないで、御兩親がどれほどお歎きなされるかを考へて、氣を取直して呉れ、え、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるではないか、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つて呉れ、よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯點頭いて、はいはいと言ふ。

女子どもは何時しか枕元をはづして四邊には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺えねども兄様兄様と小き聲に呼べば、何か用かと氷嚢を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身躰が痛くてと言ふ、それは何時も氣の立つまゝに驅出して大の男に捉へられるを、振放すとして恐ろしき力を出せば定めて身も痛からう生疵も處々にあるを、それでも身躰の痛いが知れるほどならばと果敢なき事をも兩親の頼母もしがりぬ。

おまへの抱かれて居るは誰何、知れるかえと母親の問へば、言下に兄様で御座りまじやうと言ふ、左様わかればもう仔細は無し、今話して下された事覺えてかと言へば、知つて居まする、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同顔を見合せて情なき思ひな

り。

良しぼしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、もう後生お願ひで御座
 りまする、其事は言ふて下さりますな、其やうに仰せ下さりましても私にはお返事の致
 しやうが御座りませぬと言ひ出づるに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村
 さん、何處へお出遊ばすのと岸破と起きて、不意に驚く正雄の膝を突きのけつゝ縁の方
 へと驅け出すに、それとて一同ぼらくと勝手より太吉おくらなど飛來るほどにさのみ
 も行かず縁先の柱のもとにびたりと坐して、堪忍して下され、私かわるう御座りまし
 た、始めから私が悪う御座りました、貴君に悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う
 御座りました、兄と言ふては居りまするけれど。むせび泣きの聲きこえ初めて斷續の言
 葉その事とも聞わき難く、半かかげし軒ばの簾、風に音する夕ぐれ淋し。

五

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も一昨日も、三月の以前も其前もさらに異なる事を
 ば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、學校といひ、手

紙といひ、我罪、おあとから行まする、戀しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此處に心はもぬけの殻になりたれば、人の言へるは聞分くるよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔を夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣る方なかりし當時のさまの再び現にあらはるゝなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三どの末まで嬢さまに罪ありとはいさゝかも言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高髻にお根がけは櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊ばして學校がよひのお姿今も目に残りて、何時舊のやうに御平癒遊ばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものと倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、學問はえらからうとも何うで此方のお嬢さまが對にはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の力めば、それはお前が知らぬから其様な憎ていな事も言へるものゝ三日交際をしたら植村様のあと追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方とは質が違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様が何だと聞いた時にはお可愛想な事と涙がこぼれたもの、お嬢さまの身になつては辛からうではないか、私やお前のやうなおつと來いならば事は無いけれど、不斷つゝしんで

お出遊いであそばすだけ身みにしみる事も深ふかからう、あの親切しんせつな優しい方かたを斯かう言いふては悪いわるけれど若わか旦那だんなさへ無なかつたらお嬢ぢやうさまも御病氣ごびやうきになるほどの心しんぱい配はいは遊あそばすまいに、左さ様うゑむらさまいへば植村うゑむらさま様が無なかつたら天下泰平てんかたいへいに治をさまつたものを、あゝ浮世うきよはつらいものだね、何事なにごとも明あけすけに言いふて退のける事が出来できぬからとて、お倉くらはつく／＼まゝならぬを痛いたみぬ。つとめある身みなれば正雄まさをは日毎ひごとに訪とふ事もならで、三日みつかおき、二日ふつかおきの夜よなく／＼車くるまを柳やなぎのもとに乗りすてぬ、雪子ゆきこは喜よろこんで迎むかへる時ときあり、泣ないて辭じす時ときあり、稚兒をさなごのやうになりて正雄まさをの膝ひざを枕まくらにして寐ねる時ときあり、誰たが給仕きふじにても箸はしをば取とらずと我わが儘ままをいへれど、正雄まさをに叱しかられて同おなじ膳ぜんの上うへに粥かゆの湯ゆをすゝる事もあり、癒なほつて呉くれるか。癒なほりまする。今日けふ癒なほつて呉くれ。今日けふ癒なほりまする、癒なほつて兄にい様さんのお袴はかまを仕立したてて上げます、お召めしも縫ぬふて上げます、それは辱かたじけなやく癒なほつて縫ぬふて呉くれと言いへば、左様さうしましたらば植村うゑむらさま様を呼よんで下さくだるか、植村うゑむらさま様に遇あはして下さくだるか、むゝ遇あはして遣やる、呼よんでも來くる、はやく癒なほつて御兩親ごりやうしんに安心あんしんさせて呉くれ、宜よいかと言いへば、あゝ明日あしたは癒なほりますると憚はづかりもなく言いひけり。

正まさしく言いひしを心こゝろ頼たのみに有あるまじき事こととは思おもへども明日あすは日暮ひぐれも待またず車くるまを飛とばせ來くるに、容躰ようたいこと／＼く變かはりて何なにを言いへどもいや／＼とて人ひとの顔かほをば見みるを厭いとひ、父ちち

母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬ
 とて打泣くばかり、家の中をば廣き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。
 俄かに暑氣つよくなりし八月の中旬より狂亂いたく募りて人をも物をも見分ち
 がたく、泣く聲は晝夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相す
 さまじく此世の人とも覺えずなりぬ、看護の人も勞れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植
 村に遇ひしと言ひ、今日も植村に遇ひたりと言ふ、川一つ隔て、姿を見るばかり、霧
 の立おほふて臙氣なれども明日は明日はと言ひて又そのほかに物いはず。
 いつぞは正氣に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折のありもやすると覺束
 なくも一日二日と待たれぬ、空蟬はからを見つゝもなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋
 風のおと聞こえずもがな。

青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第二巻」新世社

1941（昭和16）年7月18日発行

1942（昭和17）年4月10日再版

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「讀賣新聞」

1895（明治28）年8月27～31日

※「太吉《たきち》太吉《たきち》」と「太吉々々《たきち／＼》」の混在は、底本通りです。

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うつせみ

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>